

渡辺 悟 先生のご逝去を悼む

金沢大学大学院医学研究科脳細胞遺伝子学

東田 陽博

名古屋大学環境医学研究所附属宇宙医学実験センター

森 滋夫

日本生理学会第72回大会当番幹事、名古屋大学名誉教授・渡辺 悟先生には平成14年5月26日ご逝去されました。前日の午前にはまだお元気に仕事をされていたようですが、午後になり気分が悪いと入院され、急性肺炎が直接の原因で次の朝に急逝されました。現在においてはまだ充分にお若い69歳の年齢に、命のはかなさを思うと同時に、哀悼の念を禁じえません。

渡辺先生は、昭和32年、名古屋市立大学医学部をご卒業後、名古屋大学大学院第2生理学教室伊藤 龍教授のもとで筋肉生理学を学び、東京医科歯科大学村田計一教授のもとで微小電極法を修得した後、ミュンヘンのマックスプランク研究所へ留学されました。クロイツフェルト・ヤコブ病を記載したことで有名な医学者を父にもつクロイツフェルト教授のもとで、ネコの大脳体性感覚野及び視覚野の単一神経細胞内電位を記録する研究に従事し、脳波や定常電位の陰性の振れと神経細胞脱分極が同期する事を示すことによって脳波のオリジンを見事に証明されました。この大脳生理学の先駆的な仕事は、ルックス教授も含めた3人の共同論文として1966～67年頃発表されました。のち、両教授のもとにネーアーとサックマンが来てパッチクランプ法を発明することになります。従って、ネーアー、サックマンに受け継がれる、ユング・クロイツフェルト神経学派の隆盛時にポストドク時代を過ごされたこととなります。

帰国後、「物理学により大脳生理学」というユニークな教科書を執筆中であった岐阜大学医学部第1生理学教室竹中繁雄教授のところに助教授と



して迎えられました。視覚野の脳生理学研究は続き、光刺激に応答する神経細胞の記録はもちろんのこと、当時、サイレント細胞といわれていたアストロ細胞からも電位が記録できる事を示され、これは1968年第24回国際生理学会議にいち早く発表されましたが、このグリアの研究はその後、東田らにより今日に至るまで続くこととなります。

さらに、「頸反射」を強く主張されていた耳鼻科の福田 精教授を中心に創設された岐阜大学医学部反射研究施設の教授に就任し、皮質前庭野神経細胞の単一ニューロン活動の記録や重心計を使った姿勢の研究をされましたが、その姿勢調節の研究が宇宙生理学研究に発展する端緒となりました。

昭和59年に、御手洗玄洋教授のあとを受けて、

名古屋大学環境医学研究所航空宇宙医学教室（第5部門）に移られてからは、創始期にあった我が国の宇宙医学研究の発展に強い指導力を発揮されました。ドイツのマインツ大学フォン・バウムガルテン教授との航空機や直線加速度装置を使った共同実験をはじめ、宇宙関連の各種国際組織の主要スタッフとして国際協力に力を注ぎ、国内においても宇宙関連の各種主要委員会及び学会の重鎮として活躍され、また今後宇宙開発に必須とされるテレサイエンス技術の開発研究にも尽力されました。

平成8年の定年退官後も、藤田保健衛生大学教授から大同工業大学客員教授及び大同産業医学研究所長としてご活躍の一方、以前から手がけておられたベルリン自由大学シェーラー教授との三半規管受容器構造の研究を続けられ、最近、新しい

知見を発表されるなど、研究に対する熱意は衰えることはありません。

先生のユニークさは、学生のうちから電気回路の特許を取得したり、重心計をはじめとする測定機器の開発など、発明的な活動にいかんなく発揮されました。定年退官前には、世界に誇れる大型の直線加速度負荷装置を設置され、研究は森らにより引き継がれるとともに国内の前庭機能研究に大きく貢献しています。

残されたご遺族は、名古屋市立大で同じ生理学への道を進まれた後、放射線科医として臨床に従事された道子夫人と、2人のご子息、2人のお孫さんです。

先生の研究面における同胞、後輩を代表させていただきます、ここに心からご冥福をお祈り致します。